

何を財宝とするのか

令和三年一月法話

薬師寺 管主 加藤朝胤

ヒンドゥー教

バラモン教からヴェーダ聖典やカースト制度を引き継ぎ、土着の神々や崇拜様式を吸収しながら徐々に形成されてきた多神教

紀元前二千年頃にアーリア人がイラン・イラクからインド北西部に侵入

アーリア人は紀元前千五百年頃ヴェーダ聖典を成立させバラモン教を信仰

紀元前五世紀頃バラモン教は民間の宗教を受け入れ同化してヒンドゥー教へと変化

ヒンドゥー教は、インドの民族宗教として民衆に浸透

神々への信仰と同時に輪廻や解脱を説く

身分（ヴァルナ）・職業（ジャーティ）によりカースト制度等を特徴とする宗教

ヒンドゥー教で三大神は佛教に取り込まれ信仰される

創造の神

ブラフマー generate 生み出す、作り出す生成する

宇宙、世界に実存、実在の場を与える神

神や人が実存しているのならばブラフマーの働きによる 梵天

サラスワティーはブラフマー神の妃 弁財天

維持の神

ヴィシュヌ organize 組織化を図ること、構築する

宇宙、世界の維持、平安を司る 美と豊穡の神

世界維持の神、慈愛の神、毘盧遮那、盧遮那

ラクシュミーはヴィシュヌ神の妃 富と幸運の女神で吉祥天

破壊の神

シヴァ destroy 破壊する

宇宙、世界から創造された寿命が尽きた時に破壊、破滅を司る神

インド神話に登場する多くの神々

功德天、吉祥天と翻訳された女神ラクシュミーは、インドでは佛教が成立する前から存在するインド神話に功德が説かれている

紀元前五世紀に起きた佛教は、インド神話に登場する多くの神々を社会生活を守護する神様達として取り入れた

梵天、帝釈天、弁財天、大黒天、韋駄天等天部と言われる諸尊は、全てインド神話に登場する神々

中国における吉祥天信仰

『金光明経』四卷 四一〜四二二頃 曇無讖「功德天」と漢訳
『金光明最勝王経』十卷 唐の長安三年（七〇三）義浄（六三五〜七一三）訳

義浄（ぎじょう）唐代の僧侶

海路で印度へ渡り、鹿野苑や祇園精舎を巡拝し、帰路も再び海路で証聖元年（六九五）帰国 二十五年間に三十余国を遊歴し、四百部、五十万頌のサンスクリット経律論や金剛座、更に舍利三百粒などを齎し、三蔵法師として敬称し尊敬される

則天武后は、義浄の帰国の際は自ら洛陽の上東門外に出迎え歓待し、帰国後は則天武后の庇護のもと佛典の漢訳に専心

国家事業として洛陽や長安で訳経 漢訳経典は五十六部二百三十卷

義浄訳『金光明最勝王経』は、吉祥天と翻訳され信仰は更に盛んとなる

道慈（どうじ）『金光明最勝王経』は、渡唐僧である道慈により日本に齎される

道慈律師は、南都大安寺の僧で大宝二年（七〇二）第八次遣唐使船で唐へ渡り、西明寺に住し佛教の研鑽を積む

養老二年（七一九）十五年に及ぶ留学生活、第九次遣唐使の船で帰国

日本に於ける功德天 吉祥天の登場

『日本書紀』

天武天皇五年（六七六）十月二十日『金光明経』の講説により五穀豊穰を祈願 持統天皇八年（六九四）五月十一日『金光明経』百部を諸国に送り、毎年一月七日又は八日に必ず『金光明経』を誦誦

吉祥天の信仰

奈良時代に『金光明最勝王経』が日本に将来されてから盛んとなる

但し、『金光明最勝王経』には吉祥天の像容は説かれていない

具体的像容は、『陀羅尼集経』卷十「功德天法」・『毘沙門天王経』を典拠

頭に宝冠を被り、蔽膝という中国の高貴な女性の衣装を身に付け、瓔珞を掛け、左手に如意宝珠を持ち、右手は垂下して与願印を結ぶ立像

吉祥天の表す与願印は、衆生の願いを聞き届け成就させる事を示す行動の現れ 『陀羅尼集経』卷第十には、像の身長は、一尺三寸五分、身は端正で赤白色で二臂、種々の瓔珞・環釧・耳璫・天衣・宝冠作り、左手に如意宝珠を執り、右手を与願印とし、台座上に座る

薬師寺の吉祥天は像高が四十センチ弱で、『陀羅尼集経』に説かれる一尺三寸五分に当たる

天下泰平・風雨順次・五穀豊穰・兆民快樂・十方有情
福と富を齎し、豊穰と幸運を司る女神として深く信仰

奈良時代に将来された『金光明最勝王経』

道慈律師により将来された『金光明最勝王経』は、天平六年（七三四）大極殿に於いて初めて講説が行われる。更に天平十三年（七四一）には『金光明最勝王経』に基づいて金光明四天王護国之寺と呼ばれる国分寺の造営の詔が出される。奈良時代に『金光明最勝王経』に対する信仰が高まりを見せる『金光明最勝王経』をもとに悔過行が執行される

吉祥悔過の法会 『続日本紀』

神護景雲元年（七六七）正月八日、「機内七道諸国に勅し、一・七日間各国分金光明寺に於いて吉祥天悔過之法を行い、この功德により天下太平、風雨順時、五穀成熟、兆民快樂、十方有情同じく此の福に霑う」とあり、諸国の国分寺で正月八日から七日間、天下太平、五穀豊穰、除災増益、国家安穩、風雨順次などの祈願を目的に吉祥悔過が勤められる。同年の八月癸巳の条 神護景雲改元の詔「去る正月に二・七日の間諸大寺の大法師を奉請して、金光明最勝王経を講讀せしめ、また吉祥天の悔過に奉仕せしめた」と記されている

諸国国分寺について、神護景雲二年（七六八）からは、正月八日から十四日まで『金光明最勝王経』の講読と吉祥悔過法要の執行が毎年の恒例となる

薬師寺の吉祥天 わが国に伝来する佛画で独立した日本最初の佛画

薬師寺吉祥天像は一般の佛画と異なり、向かって右方に穏やかに歩みを進めるように描かれている

衣の裾は風になびいているような動きのあるお姿

両手は前に差し出され、左手には神通力の特徴の持物である紅い如意宝珠を持ち、右手は伏せて胸前に添えられている

顔は太い眉や肉付きのよい頬、引き締まった口元、眉目の特徴をはじめ、美しい髪際の毛描きや頸筋の描き方等、唐の影響を受けた天平美人をそのまま写したように豊満かつ艶美な姿

ふくよかに表現された肢体には多彩な衣装を身に着け、羅のような布をなびかせ截箔や纒縹彩色を併用して宝相華文・四菱文・宝尽文等の彩色文様が多用

作画は、目の細かい麻布に白下地を施し、淡墨で下描きして彩色し、截箔を置き更に細筆で画き起こしたもので、彩色部分の全体にわたって半透明の物質（荏胡麻か）が上塗りされ顔料の剥落止めを果たしている

その為千二百年を超えた今でも鮮やかな色彩が残されている
吉祥天の功德は時代を重ねるに連れ一般大衆化する

薬師寺における吉祥悔過法要

大晦日より七日に至る七ヶ日夜は休丘八幡宮で勤め、翌八日より十四日の七ヶ日夜は金堂に於いて法会を営む

宮中と諸国分寺を挙げて国家規模の法会が執行されるようになったのは、称徳天皇の『金光明最勝王経』に対する信仰と、天皇の寵愛を受け政権の中枢を担った道鏡が深く関与したと考えられている

称徳天皇朝の道鏡の佛教政策による諸国の吉祥悔過を中心とする法会は、称徳天皇の崩御に伴う道鏡の失脚後の宝龜二年（七七二）直ちに停止される

宝龜三年（七七三）十一月十日に天候不順による飢饉が起り、禍を除くため宝龜四年（七七三）正月に一ヶ七日の吉祥悔過を復活させ、恒例行事とする詔が出される

初詣（はつもうで）

新年を迎えるに当たり幸福と平和を願い、ふくよかな姿から女性美にあやかろうと「美の女神」として崇められ、更に技芸の上達を願うまでに篤い信仰を集め、各大寺の吉祥天像を巡りお徳にあやかろうと「吉祥天巡り」が盛んになる

初参り（はつまいり）

新年に神社を参詣することを「初詣」と言うが、本来は新たな年の初めに氏神様を参詣すること「初参り」は元来「年籠り」（としごもり）といい、家長が祈願のために大晦日の夜から元旦の朝にかけて氏神の社に籠る習慣

やがて年籠りは、大晦日の夜の「除夜参り」と元日の朝の「元日参り」との二つに分かれ、元日参りが今日の「初参り」の原形となる

また現在でも、除夜に一度氏神に参拝して一旦家に帰り、元旦になって再び参拝するという地方があり、これを二年参りという

人間が生活を営む住まいは本来神様の土地であって、使用に際し一年の感謝を捧げ、更に引き続きこの土地を今年も一年間使わせて頂きますとお願いの挨拶に伺う事、使用許可を得て契約の更改をし、その上で新年の無事と平安を祈願する

除日（じょじつ）

大晦日は一年の最後の日で、古い年を除き去り、新年を迎える日という意味から、「除日」といい、その夜なので「除夜」や「除夕」という

恵方参り（えほうまいり）

江戸時代末期までは氏神とその年の恵方の神社佛閣に参拝 明治以降に有名な神社佛閣への参拝が一般化する

明治十八年に初めて「初詣」として新聞に登場
電鉄会社が沿線の神社佛閣を参拝を乗客増員を目的として宣伝

鉄道に乗ることができる珍しさと楽しさが重なり、行楽優先になり有名な神社佛閣をお参りする

「初詣」は鉄道網の郊外への延伸に伴い明治中期に確立した新しい行事